

# 流星

上

永井路子

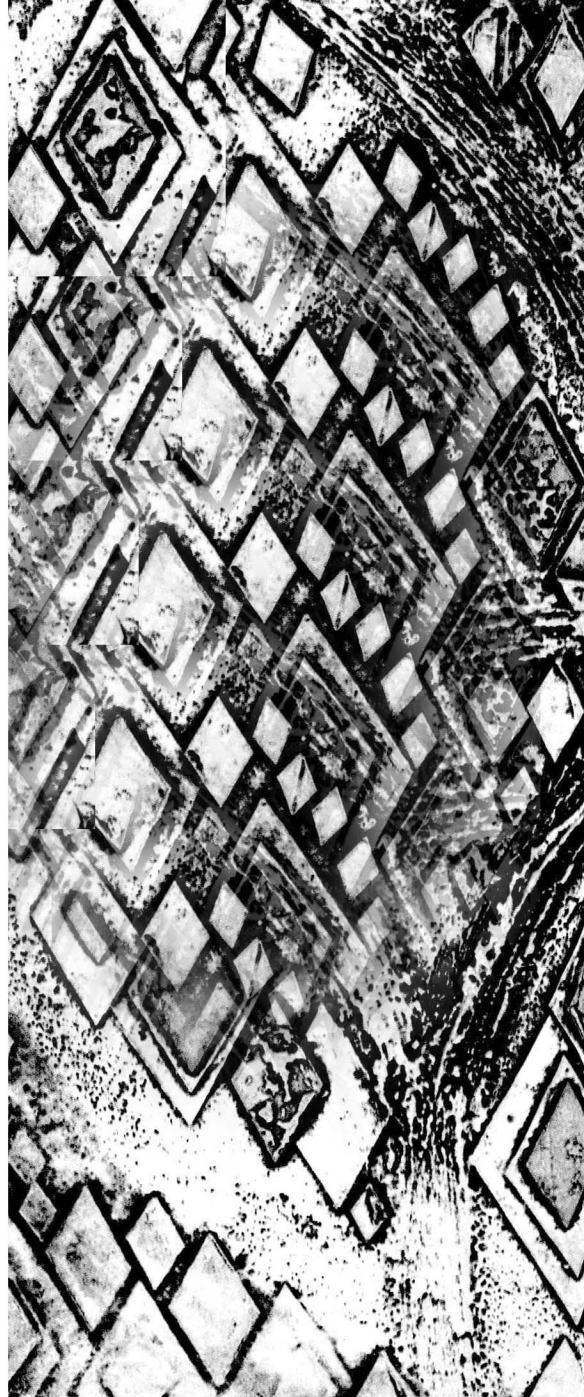


流星

お市の方上

永井路子

文藝春秋



著者略歴

一九二五年三月東京生。  
東京女子大國語専攻部卒業。  
小学館勤務を経て文筆業に入る。  
昭和三十九年「炎環」で第五十二  
回直木賞受賞。

主要著書

「北条政子」(講談社・角川書店)

「絵巻」(読売新聞社)

「王者の妻」(講談社)

「歴史をさわがせた女たち」(文藝春秋)

「朱なる十字架」(文藝春秋)

「乱紋」(文藝春秋)

「相模のものゝふたち」(有隣堂)

「悪霊列伝」(毎日新聞社)

「つわものの賦」(文藝春秋)

流星上

昭和五十四年五月二十日 第一刷

定価 九五〇円

著者 永井路子

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 大日本印刷

製本 矢嶋製本

万 落丁乱丁の場合はお取替えいたします

## 目次

|                  |            |            |            |                  |                  |                  |                            |                  |            |             |
|------------------|------------|------------|------------|------------------|------------------|------------------|----------------------------|------------------|------------|-------------|
| 永<br>禄<br>の<br>春 | 奇<br><br>蹟 | 権<br><br>六 | 骨<br><br>肉 | も<br>の<br>か<br>は | 敵<br>ま<br>た<br>敵 | 砂<br>塵<br>卷<br>く | 蝮 <sup>まむし</sup><br>の<br>娘 | 血<br>し<br>ぶ<br>き | 寒<br><br>雲 | 黒<br>い<br>瞳 |
| 169              | 153        | 138        | 122        | 107              | 91               | 75               | 59                         | 41               | 24         | 7           |

鷹

184

布武の季節

199

嫁ぐ日

213

近江路

228

光る湖

242

見えざる箴

257

雪の日の使者

270

小豆あずきの袋

284

城下の炎

299

烈日の白刃

313

装幀 関野準一郎

流星  
上



## 黒い瞳

「それがいけませぬ」

今朝も乳母うばが言う。

そして、母も言う。

「もっと、おとなになさいませ」

七歳のお市にとって、このくらい納得できない言葉はないのである。

——これ以上おとなしくなんて、できっこないわ。

すでに自分では小淑女のつもりである。毎月父の命日に行われる法要のときにも、二刻ふたとき近く、じっと坐っているではないか。膝の上に組んだ両手も、小指の先だけ、ちよつと浮かせるようにすると恰好がよいことに気がついてやってみたし、首はちゃんと立てて、こころもち顔をかしげたほうが、もっと上品に見えるということも思いついた。

その姿を見て、老臣の林通勝（佐渡）などは、

「大きくなられた姫さまのお姿を、殿にお見せしとうございましたな」  
涙まじりにそう言ったものだ。

なのに、母や乳母は、お市にもっとおとなしくしろという。

「だって、これ以上、おとなしくなんて、できっこないわ」  
口をとがらせると、乳母は言った。

「お行儀のことではございません」

そのお眼が……動きすぎるのだ、と小声になった。

たしかに、切れ長で黒眼がちのその瞳はよく動きよく見える。お城の中から堀ひとつ隔てた向うの森の松の梢にとまっているのが、雀か椋（トビ）かを見分けられるのは、多分お市だけかもしれない。風の流れ、樹々の芽ぶき——ちらとした変化やら、お城の表門から誰と誰とが入り、誰が裏門から出ていったかも、お市は見逃さない。

何につけても好奇心が強すぎるのだ。小さな体は、いわば好奇心の塊りだったといってもいい。敏捷で生命力にあふれた童女は、せいっぱい小淑女を気取ることはできても、心の動きまでは抑えられないのである。

もともと、母の意見は少し乳母とは違っている。

好奇心を持つのはいい。しかし——と言う。

「いまは、それをあらわにしてはなりませんね」

なぜ、と見上げるお市に母は答えた。

「父君のなくなられてからのこの那古野のお城ではね」

「ふうん」

何のことやら、さっぱりわからない。

——へんなおはなし……。

小淑女は理解を超える母の言葉がいささか不満である。こんなとき、唯一の仲間は侍女の小雪だ。まだ年も十六、生れたときからお市についていて、よい遊び相手でもある。

「へんねえ、お母さまったら」

お市は小雪とすぐろくをしながら言う。

「お市、その気持を大切にしろ、っておっしゃったのは、お父さまなのなもの」

「そうでございますとも」

小雪は相槌をうつ。

「お市の眼は、何でもみつけてしまうのだなあ、って殿さまはおっしゃっておいででした」

庭を歩く。歩きながら、葉の裏にすがりつく青い蜘蛛、紅い花の芯にかくれたてんとう虫——。何でもお市はみつけてしまう。

「ほら、蜘蛛が、ほら、てんとう虫が」

そのつど、華やかな声をあげなければ気がすまない。さらに、その後で、お市は黒い瞳をじつと相手にむけて、もっともらしく聞かずにはいられない。

「なぜに、てんとう虫には、模様がついてるの」

「さあ、なぜにでございましょうねえ」

聞かれた相手は、そら「なぜにのお市さま」がはじまったぞ、という顔つきになる。

——なぜに？

子供は一時期やたらにそれを聞きたがるが、お市は中でもそれが強すぎた。そして大かたの子供がその時期を過ぎてしまうと、そんな好奇心の持ち方すら忘れてしまうのに、お市は最後までそれが続いた。

それを、父の信秀のぶひではひどく面白がった。

「うむ、なかなかいいことを言うぞ、お市は」

十二男七女の中で、とりわけお市をひいきにした。

もともと、自由で型破りなことが好きな信秀だ。だから子供たちも、ただおとなしいよりも、風変りなほうを愛した。それに、彼の生きた時代が型破りを求める時代だった。というより、そうした時代だからこそ、信秀自身人を押しのけて浮かび上って来られた、といった方がいい。

信秀の家格はさして高くはない。そのころ尾張おわりに勢力があった織田という家の家来である。もともと尾張の守護として入国して来たのは斯波氏しばで、織田はその被官にすぎない。が、室町時代むろまちの末になると、斯波氏はすっかり衰え、織田がむしろ主人顔をしはじめた。その織田もそのころは分裂し、片や岩倉に城をかまえて本家を名乗れば、一方は清洲きよすに拠よって守護代となり、その城下に守護館を作てって斯波氏を手許てもとにひきつけておき、大義名分はこちらと宣伝する、といった状態だったのだ。

信秀は、この清洲織田家の三奉行の一人であり、一方の岩倉織田とも血縁関係があった。いわば臣下のようなそうでもないような、下が上を凌ぐという風潮のそのころとしては、まさしく絶好の位置で、清洲織田にびたつと馬体をつけて走らせている穴馬、といった趣であった。

信秀はだから、子供たちにも好き勝手にしろ、という方針で押し通した。これは男の子だけに限らず、女の子に対しても、人形のようなしつけのよきよりも、むしろ鮮烈な個性をよしとした。しかし、これとても、まるきり彼ひとりの思いつきではない。広い眼でみるならば、時代そのものがそうだった。それを彼は一足先に先取りし、拡大して受入れただけなのだ。もつとも、人間にとって、その一步は常に大きな意味を持つのであるが……。

ともかく、のびのびした時代だった。特に女には今から想像するより、はるかに大きな自由が与えられていた。それを裏づけるのはキリシタン史料である。ルイス・フロイスという宣教師は、一五三二年生れというから、信秀の嫡男・信長よりたった二歳しか年上でないわけだが、はるばる日本へやって来た彼は、見聞記をせっせと本国へ送り続けた。

正確にいうと、彼が日本へ着いたのは、信秀が死んで十年ほど経ってからなのだが、ともかく、上陸してみて、日本の女の思いのほかの自由さに驚いたらしく、こんなことを書いている。

「ヨーロッパでは夫が前、妻が後になって歩くが、日本では妻が前、夫が後を歩く」

「夫婦は別々の財産を持っているし、女も性の自由を持っている。婚前の娘の処女性もあまり問題にならないし、離婚をしたからといって、女の値打ちが下がるわけでもない」

この時代にこんな自由があったのか、と奇異の感にも打たれるが、これはむしろ、現代の日本

人が、徳川時代になってからはめられた儒教道德の枠の中から見るからであって、それ以前は、女はもっと自由だった。それに実家から財産の分け前も与えられていた。してみれば信秀が、お市に魂の自由さを望んだとしても、さほど不思議はないわけである。

信秀は生前、度々居城をかえた。尾張一國を切りつつ、しだいに実力をつけてゆくに従って、まるで身丈のあわなくなつた衣裳を次々ぬぎずてるように、城を移つた。勝幡しょうはたから那古野へ、そして古渡ふるわたりから末森へ――。

その末森に、琵琶法師びわはふしが来て平曲へいきょくを語つたことがあつた。信秀は勇将だったが、半面、連歌や幸若舞こうわまいに凝る風流さも持ちあわせていた。もつとも信秀は訪れた旅の連歌師から、都の状況や、諸大名の動靜を聞いたりして、彼らを情報網として活用するぬけめなさを忘れてはいなかつたが、その夜の平曲は、相手が盲法師だけに、もう少し、くつろいだ気持で女子供を集めた余興の宴となつた。そのころ異母兄の信長とともに、那古野の城に住んでいたお市も、母に手をひかれてこれを聞きに来たものだが、三つ上の姉のお犬と並んで、信秀のそばにちんまり坐つて、むずかりもせず、聞きとりにくい平曲を聞いていた彼女は、盲法師が語りおえるや否や言つたものである。

「お父さま、平曲って、食べるものじゃないのね」

「う？ 何と」

「平家ビワがあるっていうから、食べに来たの」

「あっぱっぱは」

信秀は大笑した。

「そういえば、お市は枇杷びわが好きであつたな」

法師の方へお市を押しやつて言った。

「見てごらん。あれが琵琶びわさ。お市の好きな枇杷と似てるだろう。食べものの枇杷はな、あの琵琶と似てるから枇杷びわというのだ」

「ふうん」

まじまじと父をみつめ、ややしばらくして、お市は言った。

「でも、お父さま、椿とツバキはちつとも似てないわ」

「ああ、あれは唾つばだ」

「でも刀の鏢ぶくろとも似てない」

なぜに——とお市は言つて、傍に坐つていた姉のお犬をかえり見た。

「どうしてかしらねえ、お姉さま」

と、お犬はゆつたりと笑つて肯いた。

「ほんとに、なぜでしょうねえ」

一応の返事はしたが、そんなことに、もともと疑問など感じない、というふうに落着きはらつた言い方をした。お犬は万事おどかである。きりりと引緊ったきかぬ氣の顔立ちの妹にくらべ、造作も大まかで、そのかわり大輪の牡丹ぼたんの花のような華やかさがある。信秀はこのお犬の美貌をも愛していて、その物に動じない態度を、

「姉妹の中では胆力第一」

と言ったことがある。が、万事のんびり屋で、鋭い刃物のように切りこんでくるお市を満足させる答をするたちではない。そう見て、お市はひらりと父親の方へ鋒先をかえた。

「ね、お父さま、なぜに」

——それ、始まったぞ、なぜに姫が……。

というふうに、信秀はお市の髪を撫でて笑った。

「まいったなあ、お市には」

子供っぽい疑問といえはそれまでだが、何でも、ふしぎに感じ、感じた以上つきつめて見なければすまないお市なのであった。

その夜、嫡男の信長は座に連なっていなかった。乗馬、鷹狩、騎射、水練しか眼中にない若者には、平曲などはつきあいきれなかったのであろう。その夜も、夜の遠乗りに出かけたのか、野放図な側近の手引きで、どこかへ夜這いにでも出かけていったのか……。ただ、後にお市の問いを聞きつけた彼は、十三も違う妹に、容赦もなく言ったものである。

「お市、お前みたいのを阿呆というんだ」

——兄さまって大嫌い。

お市がそう思うようになったのは、そのときからかもしれない。

たしかにお市は異母兄の信長を好きになれない。が、父の信秀にとって、信長は自慢の息子だ